

論 説

ただ一つの出来事 ——トマス・ジェファソンの歴史認識——

原 田 俊 彦

- I 「日の下に新しきことあらざるなり」
- II 信頼のおけない語り手
- III ただ一つの出来事

「日の下に新しきことあらざるなり、私たちはもうこのように言うことはできません」、トマス・ジェファソンは、1801年3月21日付ジョゼフ・プリーストリー宛書簡で、こう述べた。「なぜなら、人の歴史の中でこの章全体が新しいからです。」アメリカという共和国の広さが、そこに住む人々の少なさが、そして、物事を転換させた公論の力強い波が、新しいからである。すなわち、ジェファソンを第3代大統領に当選させた事態が、暴力を伴うことなく1801年のアメリカに「革命」を生じさせた事態が、何より新しいものだった。⁽¹⁾

ここで、ジェファソンは、アメリカは『伝道の書』に示される古典的な循環史観を克服した、という認識を示している。後になってもジェファソ

(1) Thomas Jefferson to Dr. Joseph Priestley, Mar. 21, 1801, in Merrill D. Peterson, ed., *Thomas Jefferson: Writings* (1984) [=Jefferson Writings], 1086参照。当該箇所翻訳は西川秀和『アメリカ歴代大統領大全 [第一シリーズ] 建国期のアメリカ大統領3 トマス・ジェファソン伝記事典』、213頁巻末史料7-2にもある。

(2) 「日の下に新しきことあらざるなり」という箴言は『伝道の書』1、9からの

んはこうした歴史認識を抱いていた。例えば1812年1月21日付ジョン・アダムズ宛書簡で次のように記している。「[さまざまな困難を乗り越えて] 私たちは進んできましたし、私たちは進んでいくでしょう。混乱しながらも、人類の歴史の先例を超えて繁栄するでしょう。そして、私たちが成長し続け、人口を増やし繁栄し続け、ついには、かつて人間が見ることのなかった強く賢明で幸せな社会を示すときが来ることを、私は本当に信じているのです。⁽³⁾」

このような進歩史観がジェファソンの歴史認識であると近年も指摘されている⁽⁴⁾。もっとも、そのように考える研究者にも、ジェファソンの歴史認識は進歩史観だけではない、とされる⁽⁵⁾。他方、ジェファソンには循環史観が見出される、と主張されてきた⁽⁶⁾。そもそも、「日の下に新しきことあらざるなり、私たちはもうこのように言うことはでき」ない、ということは、それまでは「日の下に新しきことあらざるなり」と言うことができた、ということの意味しうる。ジェファソンが旧約的な循環史観を抱いて

引用である。この文言がヘレニズム的な循環史観を表すことについては、Williams, James G., *Proverbs and Ecclesiastes*, in Robert Alter and Frank Kermode, eds., *The Literary Guide to the Bible* (1987), 263-282; とりわけ279参照。

(3) Jefferson to John Adams, Jan. 21, 1812, in *Jefferson Writings*, 1259参照。当該書簡所の翻訳はソール・K・パドヴァー編『ジェファソンの民主主義思想』(1961、富田虎男訳)、160頁にもある。

(4) 例えば、Helo, Ari, *Thomas Jefferson's Ethics and the Politics of Human Progress: The Morality of a Slaveholder* (2014) [= *Jefferson's Ethics*], 16-45参照。また、Valsania, Maurizio, *The Limits of Optimism: Thomas Jefferson's Dualistic Enlightenment* (2011), 33-34も参照。

(5) 例えば、Helo, *Jefferson's Ethics*, 16-17は、ジェファソンの道徳観が古代のものとは大きく異なるわけではないことを指摘する。

(6) さしあたり、Colbourn, H. Trevor, *Thomas Jefferson's Use of Past*, in *William and Mary Quarterly* 15 (1958) [= *Use of Past*], 56-70; Id., *The Lamp of Experience: Whig History and the Intellectual Origins of the American Revolution* (1965, rep. 1998) [= *Lamp of Experience*], 197-200; 204-209; 224-225参照。近年では、Cogliano, Francis D., *Thomas Jefferson: Reputation and Legacy* (2006) [= *Thomas Jefferson*], 19-66参照。

いた可能性を想定できるのである。とすれば、ジェファソンの歴史認識は、彼の生涯のある時点で何らかの原因によって（例えば1801年に合衆国第三代大統領に選出されることで）変化した、とも想定できるのである。⁽⁷⁾

ジェファソンは古典や歴史へ強い関心と愛着を持つ人物だったから、彼の歴史認識は検討に値するテーマだろう。けれども、本稿はジェファソンの個人研究を目的とするものではない。筆者は、前稿で、西洋古典にたいするアメリカ独立革命期の態様を素材に、さまざまな歴史認識がアメリカ独立革命期に存在した可能性を検討した。⁽⁸⁾ 本稿は、それを引き継ぎ、ジェファソンを素材に、アメリカ独立革命期にはある一人の個人がさまざまな歴史認識を抱いていた可能性があることを検討したい。他方、前稿では、アメリカ独立革命のイデオロギーを形成した歴史認識について検討した。⁽⁹⁾ 本稿では、アメリカ独立革命が歴史認識に及ぼした影響についても検討したい。⁽¹⁰⁾

(7) 近年、Spahn, Hannah, *Thomas Jefferson: Time, and History* (2011) [= *Time and History*] は、ジェファソンの時間観念と歴史認識の変遷を総合的に検討した。本稿の基本的な発想はSpahnの研究に大きく依拠している。

(8) 例えば、1800年1月27日付ジョゼフ・プリーストリー宛書簡で、最高の贅沢はローマやギリシアの著述家を原語で読むことで、古典を読むことから得られる喜びは何物にも代えがたい、と記している。Jefferson to Joseph Priestley, Jan. 27, 1800, in *Jefferson Writings*, 1072参照。ジェファソンの古典への強い愛着、それを育んだヴァージニアの伝統については、さしあたり、Wright, Louis B., *The Classical Tradition in Colonial Virginia*, in *Papers of the Bibliographical Society of America* 33 (1939), 85-97; Id., *Thomas Jefferson and the Classics*, in *Proceedings of the American Philosophical Society* 87 (1944), 223-233参照。

(9) 原田俊彦「進歩と循環——アメリカ独立革命の歴史認識——」早稲田法学93-3 (2018)、195-232頁参照。とりわけ循環史観については、原田「進歩と循環」、207-217頁参照。

(10) 原田「進歩と循環」、207-209頁、218-219頁、221頁、225頁参照。

I 「日の下に新しきことあらざるなり」

1 1771年8月3日付ロバート・スキップウィズ宛書簡に、28歳のジェファソンの歴史認識を見て取ることができる。ここで、ジェファソンは、道徳的な感情の鍛錬にとってはフィクションも歴史叙述も効果は同じだ、と述べている。「……マクベスによるダンカンの空想上の殺しは、……ラヴァイヤックによるアンリ4世の現実の殺しと同じような、悪行にたいする大きな恐怖心を引き起こすのではないでしようか。」このように、フィクションも歴史叙述も道徳感情を理解させるものとして等価なのだが、それはフィクションや歴史叙述というようなジャンルを超えて普遍的な道徳感情が存在するからである。他方、道徳感情の鍛錬にとっては、フィクションの方が歴史に比べ効果は高い。「歴史家が記録するそうした教訓で、徳にたいする共感を高度に鼓舞するような場合は、ほとんど生じない」からである。ここでは、道徳感情を鼓舞する歴史叙述の量および質のどちらも言及されている。まず、歴史叙述には道徳感情を鼓舞する事例はわずかしかない。そして、「倫理や神学についての無味乾燥な著作よりもはるかにリア王を読む方が、息子や娘の心に効果的な印象を残す。これが、よく書かれたロマンス、悲劇、喜劇、叙事詩についての私の考えです。」(傍点は筆者による)つまり、道徳感情を鼓舞する叙述の質という面でも、フィクションは高い効果を持つ。だから、フィクションを蔑視せず、「私たちは、フィクションの人物にも、現実の人物にも、温かい関心を持つのが賢明なのです」。

15年後、1786年8月27日付トマス・マン・ランドルフ・ジュニア宛書簡では、次のように記される。「歴史について教授の講義に加わるのは、時

(11) Jefferson to Robert Skipwith with a List of Books, Aug. 3, 1771, in *Jefferson Writings*, 741; 742参照。また、Cogliano, *Thomas Jefferson*, 27; Spahn, *Time and History*, 129-130も参照。

間の浪費となるでしょう。〔歴史についての知識〕書物から得るべきです。……一日にはいくらかの割合で心の安らいでいるはずの時間があります。とくに夕食後はより楽な作業に用いられるべきです。歴史はこの種のものに属します。……〔歴史には〕考えることも必要ですが、通常では、骨の折れる程度まで必要だというわけではありません。⁽¹²⁾」

歴史とは、カレッジで修めるべき科目ではなく、夕食後の気散じに費やすべき読書なのである。歴史は、理性（考えること）をさほど必要とせず、感性（道徳感情）を鼓舞するものだからである。感性を高めるには叙述の仕方が重要である。効果的な叙述がされている作品を、つまり、『リア王』や『マクベス』のような作品こそ、読むべきなのである。そして、感情を鼓舞する鍛錬は、ランドルフのようなカレッジに通う青年の課題ではなく、「息子や娘」つまり年少者が取り組むべき事柄である。

『ヴァージニア覚書』質問14を見てみよう。教育の第一段階として各学区に初等教育が設けられ、ここで将来の基礎が築かれる。この段階では、「子供たちの判断力はまだ十分に成熟していない」ので、「ギリシア、ローマ、ヨーロッパ、アメリカの歴史の中で最も役に立つ事実によって彼らの記憶力が蓄えられる」ことになるだろう。⁽¹³⁾ 年少者が取り組むべきなのは、判断力（理性）を必要とする事柄ではなく、感性に訴える歴史を通じて有用な事柄を憶えることなのである。

以上からすれば、ジェファソンにとって歴史とは、道徳感情の鼓舞という実践的な有用性を提供するものである。けれども、道徳感情の鼓舞は歴史のみならずフィクションによっても達成される。達成の程度は叙述の質に左右され、一般にフィクションの方が高い効果を上げる。他方、歴史

(12) Jefferson to Thomas Mann Randolph, Jr., Aug. 27, 1786, in *Jefferson Writings*, 861-862参照。また、Spahn, *Time and History*, 124-125も参照。

(13) Jefferson, Thomas, Notes on the State of Virginia, in *Jefferson Writings*, 273参照。当該箇所の翻訳はT. ジェファソン『ヴァージニア覚え書』（中屋健一訳、1972）、264頁；『世界教育学選集62 アメリカ独立期教育論』（真野宮雄、津布楽喜代治訳、1971）「ジェファソンの国民教育制度案」、17頁も参照。

も、フィクションも、道徳感情の鼓舞という共通の機能を持つのは、その道徳感情がジャンルを超えた普遍性を持つからである。それゆえ、その道徳感情はジェファソンの現在である18世紀後半にとっても有用である。つまり、過去の時代の事実もフィクションも、現在に共通する一定の普遍性を持つのである。こうした認識は、例えば、1785年8月19日付ピーター・カー宛書簡でジェファソンが推薦した読まれるべきローマ史作品のリストからも理解できる。そこでは、リウィウス、サルスティウス、カエサル、キケロの書簡、スエトニウス、タキトゥス、ギボンが上げられている⁽¹⁴⁾。つまり、ジェファソンにとっては、リウィウス以下の古典古代の作品も、近代のギボンの作品も、等価であって、いずれにも共通する普遍的な価値を持つのである⁽¹⁵⁾。

こうした歴史認識は History という範疇についてのジェファソンの理解に基づくものだろう。ジェファソンはその蔵書を History、Philosophy、Fine Arts という3つの項目に分類した。最初の History という範疇は、Civil History と Natural History という2つの下位範疇からなる。前者は時の経過を通じて行われる人間の活動である。後者は植物・動物・鉱物等について得られた情報（現在の用語では博物学）である⁽¹⁶⁾。History という範疇が人間と自然のどちらにも共通する枠組として設定されるには、人間にも自然にも共通する状態が前提として存在しなければならない。人間や自然を律する共通の法則、そして、そのような法則にしたがう普遍的な状態が前提とされねばならない。ジェファソンがこのような理解をどのようにして得たのか、本稿で検討する余裕はないが、その由来を18世紀啓蒙思想

(14) Jefferson to Peter Carr, Aug. 19, 1785, in *Jefferson Writings*, 816n. 参照。

(15) キケロの書簡をリウィウス等の歴史作品と同一視する点も特徴的だが、ここではこの点についてのこれ以上の検討は控える。

(16) Cogliano, *Thomas Jefferson*, 20参照。また、Colbourn, *Lamp of Experience*, 267-273も参照。さらに Civil History は civil history proper と ecclesiastical history に分かれ、civil history proper は ancient history と modern history に、modern history は foreign history、British history、American history に細分される。

に求めるのは困難ではないだろう。⁽¹⁷⁾

さらに、時代を超えて普遍的に存在する価値を自らのものとするには、理論による理解ではなく、感性による習得が望ましいとされる。そうした習得はできるだけ早い時期に初等教育で達成されるよう、奨励されている。⁽¹⁸⁾

以上より、歴史は人間に時代や地域を越えた普遍的な道徳感情を伝える、という理解をジェファソンに見出すことができよう。⁽¹⁹⁾

2 同様の認識は『アメリカ独立宣言』にも見出すことができる。『アメリカ独立宣言』は、まず、大陸会議内に設けられたジェファソンを含む5名の委員からなる独立宣言書起草委員会でジェファソンが起草し、次いで、ジェファソンの草案を起草委員会が修正し、さらに、大陸会議で委員

(17) 例えば、デイヴィッド・ヒューム『人間知性研究』（斉藤繁雄・一ノ瀬正樹訳、2004）、74頁「すべての国とすべての年代において人間の行為には大きな斉一性が存在し、人間本性はその原理と作用において依然として同じであるということが、普遍的に公認されている。同じ動機は同じ行為をつねに生みだし、同じ出来事は同じ原因の後に続いて生じる。野心、強欲、自愛、虚栄、友情、寛大、公共心、これらの情念は、さまざまな程度に混合され、社会へと配分されながら、世界のはじめから、これまで人類のなかに観察されてきたすべての行為と企図の源泉であったし、いまでもそうである。」啓蒙思想の歴史認識については、さしあたり、Trevor-Roper, Hugh, *The Historical philosophy of the Enlightenment*, in *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century* 27 (1963), 1667-1687参照。

(18) ジェファソンは教育についての議論でもさまざまに歴史に言及しているが、本稿ではその詳細を見る余裕がない。さしあたり、『世界教育学選集62』、9-44頁「ジェファソンの国民教育制度案」を参照。

(19) さらに、Jefferson, *A Bill for the More General Diffusion of Knowledge*, in *Jefferson Writings*, 365も参照。そこでは、専制支配を防ぐ最も効果的な方策として、「歴史が示す」ような「他の時代や国々で経験されてきた事実を民衆に知らせること」が上げられている。当該箇所は、『世界教育学選集62』、9頁、『トマス・ジェファソン伝記事典』、192頁巻末史料5-12にもある。

(20) 『アメリカ独立宣言』のテキストは、Jefferson, *Autobiography*, in *Jefferson Writings*, 19-24を参照した。そこでは、ジェファソンの草稿と大陸会議による挿入・削除が示されている。また、ジェファソンの草稿、起草委員会の修正、大陸会議による挿入・削除、これらを一瞥できる翻訳が、明石紀雄『トマス・ジェファソンと「自由の帝国」の理念』（1993）、213-219頁に掲載されている。

会案へ加筆、修正、削除が施され、大陸会議がこの最終案を1776年7月4日に採択し、それに各植民地代表が署名して、成立した。⁽²¹⁾

このように、『アメリカ独立宣言』起草者には、大陸会議においても、ジェファソン、起草委員会、大陸会議という3つの位相があり、さらに、大陸会議に代表を派遣した各植民地議会、各植民地議会議員を選出する各植民地人民といった位相も想定できる。宣言書の最後には署名があるが、この署名者が起草者であるとは限定できず、彼らを大陸会議に派遣した植民地全人民が起草者である、という想定も十分に成り立つ。⁽²²⁾ 例えば、独立の宣言は次のように表現されている。“We therefore the representatives of the United States of America in General Congress assembled, appealing to the supreme judge of the world for the rectitude of our intentions, do in the name, & by the authority of the good people of these colonies, solemnly publish & declare that these united colonies are & of right to be free & independent states”⁽²³⁾ (下線は筆者による)。したがって、『アメリカ独立宣言』は、全植民地人民の匿名文書と考えることもできよう。

この時期のとりわけ政治的な文書で筆名や匿名が用いられるのは通常のことだった。『ザ・フェデラリスト』が「プブリウス」という筆名で発表されたのは周知のことだろう。古典に由来する筆名は18世紀後半に盛んに用いられた。⁽²⁴⁾ ベンジャミン・フランクリンもさまざまな筆名・匿名を用いた。⁽²⁵⁾ ジョン・ディキンソンが「ペンシルヴェニアの農夫」という筆名を用

(21) ジェファソン自身による『アメリカ独立宣言』成立過程の叙述は、Jefferson, *Autobiography*, in *Jefferson Writings*, 17-18参照。さらに、明石『トマス・ジェファソン』208-219頁参照。

(22) これら署名者の位相に関わる『アメリカ独立宣言』署名という「言語行為」については、ジャック・デリダ「アメリカ独立宣言」思想1088 (宮崎裕助訳, 2014), 52-62頁、とりわけ56-60頁参照。

(23) *Jefferson Writings*, 23-24参照。

(24) 詳細は、Richard, Carl J., *Founders and the Classics: Greece, Rome, and the American Enlightenment* (1994), 39-43参照。

(25) 詳細は、Mulford, Carla, ed., *The Cambridge Companion to Benjamin Franklin*

いたのも著名だ⁽²⁶⁾ろう。文書が匿名で発表されるのはこの時期には通常のことであり、とりわけ、イギリス国王への非難を述べ連ね植民地の独立を宣言するという過激な内容の文書が匿名で発表されるのは、その執筆者を守るために必要なことだ⁽²⁷⁾ったろう。

さらに、全植民地人民という匿名は、文書の内容が全植民地人民に自明であることに基⁽²⁸⁾づくだろう。文書の内容の自明性は文書自体が言明している。また、後年、1825年5月8日付ヘンリー・リー宛書簡で、ジェファソンが次のように述べている。「独立宣言の目的は以下の事柄なのでした。それまでにはまったく考えられていなかった新しい原則とか新しい議論を見出すことではなく、人々の同意を集めることができるよう、その〔独立という〕主題についての常識を分かり易くしっかりと人々に示し、私たちが取らざるを得なかった独立という状態を正当化する、ということなのでした。原則や考えの独創性を目指してはませんが、それまでの特別な著作から引き写されたわけでもありません。その意図は、アメリカの精神を表現すること、まさにそのときに求められた正しい気概と精神を表現することなのでした。したがって、それにとってのあらゆる典拠は、その当時に一致⁽²⁹⁾していた考えによ⁽²⁹⁾っています。」

ジェファソンは、晩年、その墓碑銘に、『アメリカ独立宣言』の起草者、ヴァージニア信教自由法の起草者、ヴァージニア大学創設者、この3つの

(2008), 2; 25; 42; 46; 53; 59参照。

(26) Dickinson, John, *Letters from a farmer in Pennsylvania, to the inhabitants of the British colonies* (1768) 参照。

(27) こうした理解は、McDonald, Robert M. S., *Thomas Jefferson's Changing Reputation as Author of the Declaration of Independence: The First Fifty Years*, in *Journal of the Early Republic* 19 (1999) [= *Changing Reputation*], 169-195; とりわけ175-176; Id., *Confounding Father: Thomas Jefferson's Image in His Own Time* (2016) [= *Confounding Father*], 17も参照。

(28) 後注 (34) 対応本文参照。「自明 (self-evident)」という表現は起草委員会で加えられた表現である。明石『トマス・ジェファソン』、213頁参照。

(29) Jefferson to Henry Lee, May 8, 1825, in *Jefferson Writings*, 1501参照。

業績しか記させなかった。⁽³⁰⁾ ヴァージニア知事、國務長官、副大統領、大統領等々の職は何一つ記させなかった。晩年のジェファソンにとって『アメリカ独立宣言』起草は何よりも重要な事柄だったのだが、その当時の彼にも、『アメリカ独立宣言』の内容は独創的なものではなく時代精神に基づく⁽³¹⁾と理解されていたのである。

実際、『アメリカ独立宣言』が発された当時、この文書は、アメリカ民主政の諸理念を要約するものと理解されたのではなく、文書の表題通り、アメリカ植民地の独立を宣言する文書と捉えられた。第2次大陸会議議長ジョン・ハンコックは、大陸会議でこの文書が採択されると、直ちにそれぞれの植民地に送付し、それが読み上げられるよう、各地域に委ねた。⁽³¹⁾したがって、この文書の第一の機能はアメリカの独立という事実の伝達にあつた。⁽³²⁾ジョゼフ・バートンという人物が甥のヘンリー・ワイズナー宛に送った1776年7月9日付書簡では次のように記された。「私が王に厄介をかけたことはほとんどなかった。同時に彼と戦うこともできなかった。けれども、今や、この状況は一掃された。……われわれが自由な国家であると宣言されるまで、多くの者たちは何もできなかった。けれども、今や、われわれの国家を守るために自分たちの生命も財産も投げ出す覚悟が彼らにはあるのだ。⁽³³⁾……」

他方、『アメリカ独立宣言』で人権思想は次のように表記されている。“We hold these truths to be self-evident: that all men are created equal; that they are endowed by their creator with certain inalienable rights; that

(30) Jefferson, Epitaph [1826], in *Jefferson Writings*, 706参照。

(31) 各植民地での伝達・発表の過程の詳細は、Hazelton, John H., *The Declaration of Independence: Its History* (1906, rep. 1970), 240-281参照。

(32) この点については、Detweiler, Philip F., *The Changing Reputation of the Declaration of Independence: The First Fifty Years*, in *William and Mary Quarterly* 19 (1962) [= *Changing Reputation*], 557-574; とりわけ558; Maier, Pauline, *American Scripture: Making the Declaration of Independence* (1997) [= *American Scripture*], 155-160も参照。

(33) Maier, *American Scripture*, 156; 273n.4に引用されている。

among these are life, liberty, & the pursuit of happiness……”⁽³⁴⁾ これに先んじて1776年5月にジョージ・メイソンが起草し起草委員会で修正されたヴァージニア権利章典では次のように述べられている。“that all men are born equally free and independent, and have certain inherent natural rights, of which they cannot, by any compact, deprive or divert their posterity; among which are the enjoyment of life and liberty, with the means of acquiring and possessing property, and pursuing and obtaining happiness and safety.”⁽³⁵⁾ さらに、1776年6月29日に採択されたヴァージニア憲法の叙述はこうである。“that all men are by nature equally free and independent, and have certain inherent rights, of which, when they enter into a state of society, they cannot, by any compact, deprive or divest their posterity; namely, the enjoyment of life and liberty, with the means of acquiring and possessing property, and pursuing and obtaining happiness and safety.”⁽³⁶⁾ こうした内容上の類似から、『アメリカ独立宣言』はヴァージニア権利章典あるいはヴァージニア憲法を参照したと指摘されてきた。⁽³⁷⁾

ところで、1776年7月15日から起草が始まり9月28日に発効したペンシルヴェニア憲法では次のように定められた。“That all men are born equally free and independent, and have certain natural, inherent and inalienable rights, amongst which are, the enjoying and defending life and liberty, acquiring, possessing and protecting property, and pursuing and obtaining happiness and safety.”⁽³⁸⁾ 1777年7月8日に批准されたヴァーモン

(34) *Jefferson Writings*, 19参照。

(35) Maier, *American Scripture*, 165に引用されている。

(36) Thorpe, Francis Newton, ed., *The Federal and State Constitutions, Colonial Charters, and Other Organic Laws of the States, Territories, and Colonies* [= *Federal and State Constitutions*] I-VII (1909, rep. 1993), VII, 3813参照。

(37) 例えば、明石『トマス・ジェファソン』、225頁参照。

(38) Thorpe, *Federal and State Constitutions*, V, 3082参照。

ト憲法は次の通りである。“That all men are born equally free and independent, and have certain natural, inherent unalienable rights, amongst which are the enjoying and defending life and liberty; acquiring, possessing and protecting property, and pursuing and obtaining happiness and safety.”⁽³⁹⁾ さらに、1780年6月15日に成立したマサチューセッツ憲法では、“All men are born free and equal, and have certain natural, essential, and unalienable rights; among which may be reckoned the rights of enjoying and defending their lives and liberties; that of acquiring, possessing, and protecting property; in fine, that of seeking and obtaining their safety and happiness.”⁽⁴⁰⁾ とされる。

これら革命期の諸邦憲法によれば、当時、一定の人権思想が存在し、その表現はヴァージニア権利章典を雛形とした、と理解できよう。『アメリカ独立宣言』もそうした人権思想に基づくが、その表現は革命期には例外で、他の人権宣言の参考にはならなかったようである。⁽⁴¹⁾ よって、『アメリカ独立宣言』に示される人権思想は革命期には自明のものであり、この文書の第一の機能は独立の宣言を伝えることにあったと考えられる。

『アメリカ独立宣言』に記される人権思想が当時は共通の認識だったことは、ジェファソンの草稿にたいする大陸会議の削除箇所からも理解できよう。そのほとんどが、ジェファソンの草稿の後半部分にある、イギリス国王およびイギリス議会を告発し非難する箇所である。とりわけ、イギリス国王が奴隷制廃止を妨害したという箇所、そして、アメリカがイギリスの「同朋」から「決別」せざるをえないという箇所である。⁽⁴²⁾ けれども、大陸会議は人権思想を記す箇所にほとんど手を入れていない。したがって、

(39) Thorpe, *Federal and State Constitutions*, VI, 3739参照。

(40) Thorpe, *Federal and State Constitutions*, III, 1889参照。

(41) この点は、Detweiler, *Changing Reputation*, 561-562; Maier, *American Scripture*, 163-167も参照。

(42) *Jefferson Writings*, 22-23; 明石『トマス・ジェファソン』、216-218頁参照。

(43) *Jefferson Writings*, 19; 明石『トマス・ジェファソン』、213-214頁参照。

ジェファソンの記す人権思想は大陸会議の了解事項だったと理解できよう。

とすれば、なぜ、『アメリカ独立宣言』は人権思想についてこの当時の雛形とは異なる表現を採用したのだろうか。ジェファソン自身によれば、『アメリカ独立宣言』は当時一般に抱かれていた考えを「分かり易くしっかりと」民衆に表現しようとするものだった。重要だったのは叙述の仕方、効果的な叙述なのである。従来の雛形よりも効果的な叙述をジェファソンは試みようとしたのだろう（「それまでの特別な著作から引き写されたわけでもありません」）。このように、ジェファソンは内容ではなく表現に腐心した⁽⁴⁴⁾のである。

以上より、『アメリカ独立宣言』にも前節で確認できた認識を見出すことができる。ジェファソンは、誰もがいつの時代でも自明のこと（self-evident）としている内容をいかに効果的に叙述するか、この文書で試みた。つまり、「すべての人間が造物主によって一定の誰にも譲ることので

(44) 叙述へのジェファソンの拘りは、大陸会議による草案への修正・削除にジェファソンが不満を抱いたであろうことから理解できよう。『アメリカ独立宣言』採択直後の1776年7月8日付リチャード・ヘンリー・リー宛書簡で、大陸会議の修正・削除によって文書が良くなったかどうか、ジェファソンはリーに意見を求めている。Jefferson to Richard Henry Lee, July 8, 1776, in Julian P. Boyd et al., eds., *The Papers of Thomas Jefferson* (1950-), [= *Papers of Jefferson*] I, 455-456参照。また、1776年8月10日付ジェファソン宛のエドモンド・ペンドルトンの書簡によれば、ジェファソンはペンドルトンにも大陸会議による修正・削除について考えを聞いたようである。ペンドルトンは大陸会議で採択された文章よりジェファソンの草稿を評価している。Edmund Pendleton to Jefferson, Aug. 10, 1776, in *Papers of Jefferson*, I, 488参照。ペンドルトンの記述から、ペンドルトン宛書簡は7月29日付のものと推論できるが、その書簡は失われてしまった。*Papers of Jefferson*, I, 491n. 参照。削除された箇所は、先に見たように、人権思想に関する叙述ではないが、イギリス国王とイギリス議会議を告発することで植民地の独立をより効果的に民衆に提示しようという意図が挫かれたと感じて、ジェファソンは不満を覚えたのだろう。他方、McDonald, *Changing Reputation*, 177-178; Id., *Confounding Father*, 19; デリダ「アメリカ独立宣言」60頁は、大陸会議の修正によってジェファソンは独創性にたいする自負を傷つけられたとする。

きない権利を授けられている」という、すべての時代にも想定できる普遍の事柄を効果的に叙述しようとしたのである。

3 こうした認識は、歴史認識としては、ジェファソンにおいては循環史観として現れている。ジェファソンは、『イギリス領アメリカの諸権利⁽⁴⁵⁾についての意見の要約』で、サクソン人のイングランドへの移住と父祖であるイングランド人のアメリカへの入植⁽⁴⁶⁾について述べている。

「私たちの父祖たちは、アメリカに移住する前には、ヨーロッパのブリテンという地域の自由な住民だった。彼らは自然がすべての人々に与えた権利を持っていた。彼らは、その権利に基づいて、彼らの選択によるのではなく偶然が彼らをそこにおいた地域から旅立ち、新しい住処を探し求め、人々の幸福を最も促進できるだろう法と規律の下で新しい社会を設立した。彼らのサクソン人の祖先たちも、この普遍の法の下で、同じようにして、ヨーロッパ北部にある自分たちが生まれた荒野と森を後にして、当時は住民がさほど多くはなかったブリテン島を自らのものとした。その地で、彼らは法のシステムを確立し、その法のシステムは長らくかの国の栄光と保護であり続けた。……ブリテン人の移住とサクソン人の移住とを実質的に区別する事情は何も生じなかった、と考えられる。アメリカは征服され、そこに入植地が設けられ確立されたのは、個人個人の犠牲によるのであって、イギリス政府の働きではない。……彼らは彼ら自身のために戦い、彼ら自身のために征服し、彼ら自身のために保有する権利を持つのである。」⁽⁴⁷⁾

(45) Jefferson, A Summary View of the Rights of British America, in *Jefferson Writings*, 103-122. 松本重治編『世界の名著33 フランクリン ジェファソン マディソン他 トクヴィル』(1970)、209-231頁に翻訳がある。

(46) 以下の叙述から理解できるジェファソンの歴史認識については、Colbourn, *Use of Past*, 66-68; Id., *Lamp of Experience*, 197-199; Cogliano, *Thomas Jefferson*, 22-23参照。また、Spahn, *Time and History*, 118-120も参照。なお、歴史叙述が『意見の要約』で果たしている機能については、Conrad, Stephen A., *Putting Rights Talk in Its Place: The Summary View Revisited*, in Peter S. Onuf, ed., *Jeffersonian Legacies* (1993), 254-280; とりわけ262-264参照。

(47) *Jefferson Writings*, 105-106参照。本文の翻訳は私訳だが、『世界の名著33』

ブリテン島へのサクソン人の移住とイングランド人のアメリカ入植は、自然法上の権利（自然がすべての人々に与えた権利）に基づく本質的に同じものであり、イングランドで生じた事象が10世紀以上も後にアメリカで繰り返されたのである。

さらに、土地保有を例としてサクソン人とアメリカ人の同一性が述べられる。「サクソン人が入植した時期である、より早い時期には封建的土地保有はほとんど確実に知られていなかった。ノルマン・コンクエストの時期にすら、封建的保有はごく小規模に導入されていただけである。私たちのサクソン人の祖先たちは、彼らの個人財産にたいするのと同様に、絶対的な支配の下で彼らの土地を保有し、何らかの上位の階梯に煩わされることもなかった。彼らの保有は、allodial という封建制の用語が示す保持の性質にはほぼ適うものだった。ノルマン公ウィリアムが、初めて、一般に、封建的保有のシステムを導入した。……けれども、まだ、サクソン人の服従者には多くの土地が残されていた。そうした土地は、支配者には保持されず、封建的条件に服することもなかった。……したがって、封建的保有は土地保有についてのサクソン人の法の例外に過ぎないのである。サクソン人の法の下では、すべての土地は絶対的な権利の下に保持された。これがコモン・ローの基礎、土台を形成し、例外が生じない場合にはどこでも普及していた。……アメリカはノルマン公ウィリアムに征服されたのでも、その土地が彼あるいは彼の後継者の誰かに服属したのでもない。アメリカにおける土地の保有は、疑いなく、allodial という性質を持っている。⁽⁴⁸⁾」

サクソン人も、アメリカ人も、共に、自然が与えた権利に基づき移住・入植し、封建制では allodial と呼ばれる土地保有形態を獲得した。両者の土地保有形態は自然権に基づきその本質を共通にするのだから、アメリカ植民地ではサクソン人の状態が繰り返されているのである。

さらに、1776年8月13日付エドモンド・ペンドルトン宛書簡で、免役地

210頁の翻訳も参照した。

(48) *Jefferson Writings*, 118-119参照。『世界の名著33』226-227頁の翻訳も参照。

代、長子相続、限嗣相続を議論して、再び、サクソン人の制度が言及されて⁽⁴⁹⁾いる。「私たちがこれまで封建制度を廃してきたことで私たちはよりよくなったのではないのでしょうか。古いサクソン人の法をすべて復旧することは、幸せな結果を招くのではないのでしょうか。私たちの父祖たちのその幸福なシステムに、人の英知がかつて考え出したものの中でも最も賢明で最も完全なそのシステムに、8世紀より前に存在していたそのシステムに、私たちが直ちに立ち返ることは、今ではよりよいことなのではないのでしょうか。⁽⁵⁰⁾」

ジェファソンは、何百年を隔ててもサクソン人の制度を復旧しなければならない、と主張する。その制度は人間の「最も完全なシステム」だからである。そして、18世紀のアメリカにそれを復旧できるのは、その制度が⁽⁵¹⁾時代を超えた普遍的な存在だからなのである。

以上、検討してきたように、少なくとも1780年代半ばまでのジェファソンは、歴史の中には普遍的な事象が存在し、そうした事象は時代や地域を越えて繰り返される、と認識していたのである。

II 信頼のおけない語り手

1 歴史には普遍の事象が存在し、年少者の感性に訴える効果的な叙述

(49) この書簡については、Colbourn, *Use of Past*, 69; Id., *Lamp of Experience*, 204-205; Cogliano, *Thomas Jefferson*, 23も参照。

(50) Jefferson to Edmund Pendleton, Aug. 13, 1776, in *Jefferson Writings*, 752参照。

(51) ジェファソン宛のペンドルトンの返書が興味深い。ペンドルトンは、免役地代を採用すればヴァージニア邦は税収入を得ることができるとして免役地代に賛成し、ジェファソンの考えを過激な刷新と考えている。そして、次のように記す。「私は一般に古いサクソン人の法を高く評価しています。ですが、何世紀もの経験をした後で、よりよいものだからそれらをまったく変えないでおくことができる、とはとても考えられないのです。」Edmund Pendleton to Jefferson, Aug. 26, 1776, in *Papers of Jefferson*, I, 507参照。

でそれらを描き、徳に満ちた振る舞いを人々に伝え、繰り返させる、これこそが、1780年代半ばまで、ジェファソンにとって、歴史叙述の目的だった。けれども、普遍的な事柄は、叙述が効果的でさえあれば、誰でも感知できるものなのか。ジェファソンは、サクソン人のユートピアを検討する過程で、イングランドのコモン・ローとキリスト教の関係という問題に遭遇した。この主題を扱う作品を読み進めるうちに、権威とされている者たちの見解に同意できないものがあることをジェファソンは気付いた。歴史叙述の中には信頼できるものとそうでないものがあると認識されたのである。例えば、マシュー・ヘイルは「典拠を引用していない」から信頼できない。ウィリアム・ブラックストンも、「ヘイルを引用している」から信頼できない。⁽⁵²⁾ こうして、ジェファソンは歴史叙述の典拠に目を向けるようになった。

とりわけ革命期に、ジェファソンはヴァージニア邦の憲法および法律の制定と改訂に取り組んだ。それを回顧して1796年1月16日付ジョージ・ワイス宛書簡で次のように述べている。「ヴァージニアの法律についての私の研究の早い段階で、私は次のことに気付きました。それら〔＝ヴァージニアの早い時期の法律についての史料〕の多くがすでに失われてしまっていて、わずかな写しが慎重で好奇心に溢れた人たちの掌中にあるだけで、彼らが死んでしまえば、それらの写しもおそらく反古紙になってしまうだろう、と。ですから、私は、まだ残っていた写しのすべてを収集する作業に取りかかりました。そうすれば、私たちの繁栄についての、私たちの歴史についての、こうした貴重な記念の大部分が失われてしまったことに公衆が注意を向ける日がきたとき、その時代の人々は史料の損失を残念に思うでしょうが、破損を免れた一部の史料が提供する情報によって、わずかではありましようが、人々は救われることになるでしょう。その結果、そ

(52) *The Commonplace Book of Thomas Jefferson: A Repertory of his Ideas on Government, with an Introduction and Notes by Gilbert Chinard* (1926), 352; 353参照。

これらの情報は、彼らの関心を得て、保存されることになるでしょう。」こうして、ジェファソンは歴史史料の収集に勢力を注ぐようになった。けれども、経験を積むうちに、次の事態が認識された。収集した文書もやがて「動かすことができなくなるでしょう。動かせば壊れてしまい、一葉ごとに分かれてしまい、ときには粉々になってしまうでしょう。」さらには、「私たちの経験からすれば、公共機関で写本に保存されている一葉あるいは数葉も、大きな時間の経過に耐えうるものではないことが証明されました。火事や凶暴な敵による破損こそ、私たちが、今、嘆き悲しむところのその損害を生みだした大半の原因なのです。」つまり、写本を古文書館に保存するだけでは十分ではないのである。「古代の貴重な作品のどれだけ多くが失われたのでしょうか。」ジェファソンはこう答える。「印刷術が写しの数を増やし写しを広めることをできるようにしてから、失われたものがあるのでしょうか。」⁽⁵³⁾

こうしてジェファソンは史料保存のために史料を印刷出版する計画に関わることになる。1774年、エビニーザー・ハザードが、同年8月23日付ジェファソン宛書簡で、ジェファソンに助力を求めた。ハザードはアメリカ植民地の歴史文書を5巻本に収集し出版する計画を持っていて、ヴァージニアに関連する文書の調査と出版に援助して欲しい、と⁽⁵⁴⁾ジェファソンは、大喜びでこれを認め、約60の文書を掲載したリストを作成して、それらの文書をハザードの収集に加えるよう、勧めた。⁽⁵⁵⁾さらに、ヴァージニアでの作業を援助し、ヴァージニアで出資者を見つけることにも助力しよう⁽⁵⁶⁾と伝えた。けれども、ハザードの作業は、独立戦争のため頓挫し、最終

(53) Jefferson to George Wythe, Jan. 16, 1796, in *Jefferson Writings*, 1031-1032 参照。

(54) Ebenezer Hazard to Jefferson, Aug. 23, 1774, in *Papers of Jefferson*, I, 144-146 参照。

(55) List of Papers for Hazard's Proposed Collection, in *Papers of Jefferson*, I, 146-149 参照。

(56) Jefferson to Hazard, Apr. 30, 1775, in *Papers of Jefferson*, I, 164 参照。

的には1792年と94年に2巻本で出版された。⁽⁵⁷⁾

ハザードの作品が出版されるまで、歴史叙述にたいするジェファソンの関心が薄らいだわけではなかった。彼はアメリカ独立革命の当事者として生き、彼自身がそれについての第一の証言者であることを自覚していた。とりわけ、パリに滞在していた1780年代半ばには、フランス人が合衆国について叙述する際、彼らから助言を求められた。

1786年に、ジェファソンは、ジャン・ニコラ・デムーニエに、独立以来の合衆国の国制、政治、経済、社会に関する相当数の情報を提供した。そうして、合衆国についてのデムーニエの間違った情報や偏見を正そうとした。⁽⁵⁸⁾それは一定の成果を収めたようである。1784年からジェファソンの私設秘書を務め、1785年にジェファソンに随行してパリに滞在していた、ウィリアム・ショートは、1786年10月25日付ウィリアム・ネルソン宛書簡で、次のように記している。「ジェファソン氏の点検で、彼〔＝デムーニエ〕は最も目に余る間違いを削除し訂正いたしました。……事実については悪しき振る舞いが良き行いに、考えについては非難が賞賛に変わったの⁽⁵⁹⁾です。」

歴史の目撃者たるジェファソンの試みはひとまず成功した。先に紹介した1786年8月27日付トマス・マン・ランドルフ・ジュニア宛書簡で、ジェファソンは次のように記している。「自身の時代について書いている著者、あるいは、自身の時代に近い時期について書いている著者は、彼自身の考⁽⁶⁰⁾えと方法で、彼が書いている時期の最良の像を提供してくれます。」

(57) Hazard, Ebenezer, *Historical Collections; Consisting of State Papers, and Other Authentic Documents; Intended as Materials for an History of the United States of America*, 2 vols. (1792-1794) なお、ハザードについては、Shelley, Fred, Ebenezer Hazard: America's First Historical Editor, in *William and Mary Quarterly* 12 (1955), 44-73参照。

(58) The Article on the United States in the *Encyclopédie Méthodique*, in *Papers of Jefferson*, X, 3-65参照。

(59) William Short to William Nelson, Oct. 25, 1786, in *Papers of Jefferson*, X, 3参照。

2 けれども、自身の時代を記しても、自身の時代に生じた事象の経験者から当該事象の情報を得て自身の時代を記しても、なお、その叙述に信頼をおけない場合があることを、ジェファソンは認識する。

トマス・マン・ランドルフ・ジュニア宛書簡からほぼ1年後の1787年8月29日、ジェファソンは“An American”という匿名で *Journal de Paris* の編集者に宛てて書簡を記した。⁽⁶¹⁾ 歴史上の諸同盟とアメリカ革命の比較研究を主題として、マイエールという人物が著した作品について、同日発刊の同誌に匿名書評が掲載された。ジェファソンはそれを読み激怒し絶望に駆られた。「私が若かったころ、私は歴史書や旅行書を読むのに熱中しておりました。私どもをイギリスから引き離れた先の革命が始まって以来、私どもの祖国も歴史家や旅行者の筆を使うに価するものと考えられるようになりました。そうした作品が私に与えた苦痛を私はあなたに語ることはできません。これらの私が愛好したジャンルの読書を私はもはや断念せざるを得ないようです。私は私の心に幻や間違いを育むために全人生を費やしてしまった、このことがとうとう明らかになったのです。」なぜなら、その書評にはジョン・ディキンソンがアメリカの解放者だと記されていたからである。けれども、『アメリカ独立宣言』は、「ディキンソン氏を除く [大陸会議の] すべての構成員によって署名されました。その日についての *Journals of Congress* をご覧下さい。その文書と署名者の名前を見ることができます。ディキンソン氏の名前がその中に含まれていないことも見ることができます。」(傍点箇所は原文ではアンダーラインが付されている)「私はその場におりました。ですので、ことの成り行きを正確にあなたに伝えることができるのです。」

ジェファソンにとって問題はこうだった。ある時代に何らかの出来事が生じ、その時代の人がある事象について間違った叙述をした。このとき、

(60) *Jefferson Writings*, 862参照。

(61) この書簡については、Maier, *American Scripture*, 169; Spahn, *Time and History*, 151-153も参照。

その時代の他の人々がその叙述にたいして異議を唱えなかったならば、「後世の人々がどれだけ正確な情報を得ることができると私たちは期待できるのでしょうか。存命中に間違いへ反対の声を上げなかった人々が真実を証言するために墓場から甦る、といったことがあるのでしょうか。同時代に書かれた歴史がこのように間違いだとすれば、将来編纂されるものはどのようなものになるのでしょうか。」⁽⁶²⁾

ジェファソンは、結局、この書簡を投函しなかったようである。⁽⁶³⁾そのため、『アメリカ独立宣言』成立を巡る議論は、この時点では、生じなかった。⁽⁶⁴⁾他方、本稿にとっての問題はジェファソンの認識である。ある時代に生じた事柄をその時代に生きたすべての人々が正確に認識するわけでは必ずしもない、このことをジェファソンは学んだのである。ある人物が自身の時代に生じた事象を記しても、その叙述に信頼をおけない場合があることを認識したのである。ジェファソンは「その場にいた」からその事象について正確に伝えることができた。ある事象は、ある個人が「その場にいた」という状況を前提として初めて、正確に伝えることができる。つまり、何らかの事象は「その場にいた」個人に限定される現象である、と認識されたのである。

けれども、ある事象が生じた「その場にいた」個人がその事象を正確に

(62) Jefferson to the Editor of the Journal de Paris, Aug. 29, 1787, in *Papers of Jefferson*, XII, 61-64参照。

(63) この点については *Papers of Jefferson*, XII, 64n 参照。投函されなかった根拠が列挙されている。

(64) ジェファソンが起草者であることも周知の事実ではなかった。とりわけ、McDonald, *Changing Reputation*, 178-180; Id., *Confounding Father*, 19-20参照。『アメリカ独立宣言』の起草者としてジェファソンに最初に公に言及したのは、1783年5月8日のエズラ・スタイルズの説教とされる。 *The United States elevated to glory and honor. A sermon, preached before His Excellency Johathan Trumbull, Esq. L. L. D, governor and commander in chief, and the Honorable the General Assembly of the state of Connecticut, convened at Hartford, at the anniversary election, May 8 th, 1783. By Ezra Stiles, D. D. president of Yale-College* (1783), 46 には、その旨の表現が認められる。

伝えるならば、その情報は後世に正確に伝わっていくのだろうか。ある人物が正確な情報を得た場合、その人物がその情報を正確に叙述することは、無条件に保障されるのだろうか。ジェファソンはこの問題も認識するようになる。

1786年にデムーニエへの助言が成果を上げたことに気をよくして、ジェファソンは他のフランス人にも情報を提供した。1785年、フランソワ・スーレがアメリカ革命についての歴史書を刊行した。⁽⁶⁵⁾翌年の夏、ジェファソンはスーレに会い、スーレがその作品の改訂拡大版の執筆・出版を計画していることを知った。そこで、ジェファソンは、スーレの初版にたいするコメントとジェファソンが取り組んできたヴァージニアの法律改正についての情報を、スーレに提供した。スーレは1787年に改訂版の第4巻を刊行した。そこで、スーレはジェファソンの好意に触れてはいるが、スーレによるアメリカ革命の評価は積極的なものではなかった。革命の理想は独立戦争後のアメリカ社会の腐敗のため損なわれてしまった、と結論づけた。⁽⁶⁶⁾正確な情報を与えたとしても、その情報通りの叙述が実現する保障は必ずしもないことを、ジェファソンは学んだ。

同時代の語り手であっても、信頼のおける情報を得ている語り手であっても、彼らの中には信頼のおけない語り手がいることを、ジェファソンは認識したのである。⁽⁶⁷⁾

3 したがって、信頼のおける語り手とは、ある事象が生じた現場においてその事象について信頼できる叙述をする人物、あるいは、ある事象に立

(65) Soulés, François, *Histoire de troubles de l'Amérique anglaise* (1785).

(66) Soulés, *Histoire de troubles de l'Amérique anglaise: écrite sur les mémoires les plus authentiques dédiée a sa Majesté très-chrétienne* (1787), IV, 263-266参照。

(67) ここで「信頼のおけない語り手」と概念化している位相には、誤解しうる内容を故意に伝える語り手、情報が乏しく正確でない内容を伝える語り手、情報は十分得られているが当該の事象についての理解が乏しく正確でない内容を伝える語り手等々、「信頼がおけない」という状況を生み出す、すべての位相が含まれている。「信頼がおけない」という判断は、さまざまな位相には左右されず、語り手が提供するテキスト外部のメタレベルで生じる。

ち会った人物から正確な情報を得てその情報に基づいて信頼できる叙述を行う人物となる。

ジェファソンは、そのような人物として、デイヴィッド・ラムゼイとウィリアム・ゴードンを見出した。ラムゼイは、1785年の夏、革命期のサウス・カロライナの歴史を描いた自著の頁見本をジェファソンに送り、フランス語に翻訳してフランスで出版するための助力を求めた。ジェファソンは、その内容の素晴らしさを認め、援助を約束した。⁽⁶⁸⁾

ゴードンも、1787年2月に、執筆中だったアメリカ革命の歴史書について、出版の援助を求めた。ジェファソンは、ゴードンのその作品をまったく読んでいなかったが、その申し出を快く引き受けた。その理由を次のように述べている。「さまざまな機会から、あなたは他の歴史家たちが知ることのない事実を知っています。それらを正確に記すあなたの立場、あなたの周知の才能、これらによって、あなたの作品が歴史科学に貴重な追加となるだろう、と私は楽天的に考えています。それ以上に、尊敬すべき私たちの戦争を主題とする作品はほとんど存在しないのです。」⁽⁶⁹⁾

ジェファソンがこの2人を評価した第一の理由は、彼らが革命の現場に立ち会っていたことだろう。ラムゼイは、1776年から1783年にかけてサウス・カロライナ議会議員であり、1782年から1786年までは大陸会議のサウス・カロライナ代表の一人だった。⁽⁷⁰⁾ゴードンは、アメリカ革命で重要な役割を担ったマサチューセッツ邦の従軍牧師で、ジェファソンが述べるように、「他の歴史家たちが知ることのない事実を知って」いた。⁽⁷¹⁾そして、彼らはアメリカ革命を正しきものと捉えその価値を後世に伝えるためにその

(68) David Ramsay to Jefferson, June 15; July 13; Aug. 8, 1785, in *Papers of Jefferson*, VIII, 210-211; 293-294; 359-360; Jefferson to Ramsay, Aug. 31, 1785, in *Papers of Jefferson*, VIII, 457参照。

(69) William Gordon to Jefferson, Feb. 20, 1787, in *Papers of Jefferson*, XI, 172; Jefferson to Gordon, July 2, 1787, in *Papers of Jefferson*, XI, 525参照。

(70) *Encyclopædia Britannica* XXII (1911), s. v. Ramsay, David, 879参照。

(71) ゴードンについては、Pilcher, George William, William Gordon and the History of the American Revolution, in *Historian* 34 (1972), 447-464参照。

歴史書を著した。⁽⁷²⁾ さらに、ゴードンについて述べられているように、ジェファソンは事実を正確に記す才能を彼らに認めていた。⁽⁷³⁾ こうして、彼らの作品は刊行された。⁽⁷⁴⁾

けれども、ジェファソンにとって、何らかの同時代の事象について、それが生じた現場に居合わせ、正確な情報を持ち、その正確な情報に基づいて信頼のおける叙述ができる人物は、ジェファソン自身にほかならなかつたろう。パリから帰還したジェファソンにそのような叙述を実現できる物理的な余裕はなかった。しかし、そのための準備をジェファソンは怠らなかつたようである。

後にこの時期を回顧してジェファソンは次のように述べている。「その職 [1790年3月に就任した国務長官職] に従事していた早い時期には、私は業務の遂行について記録は取っていなかった。けれども、しばらくすると、記憶のためにノートを取っておくのが重要だと分かった。そこで、私

(72) この時期に発表されたアメリカ革命を対象とする歴史叙述の目的については、さしあたり、Cohen, Lester H., *The Revolutionary Histories: Contemporary Narratives of the American Revolution* (1980), 185-211; Id., *Creating a Usable Future: The Revolutionary Historians and the National Past*, in Jack P. Greene, ed., *The American Revolution: Its Character and Limits* (1987), 309-330参照。

(73) 彼らは歴史書を刊行するに先立っていくつかの作品を公にしていた。例えば、Ramsay, *An Oration on the Advantages of American Independence: Spoken before a Publick Assembly of the Inhabitants of Charlestown in South-Carolina, on the Second Anniversary of that Glorious Era* (1778)、また、Gordon, *The Doctrine of Final Universal Salvation examined and shewn to be unscriptural in answer to a pamphlet entitled Salvation for all men illustrated and vindicated as a Scripture doctrine* (1783) である。

(74) Ramsay, *The History of the Revolution of South-Carolina from a British Province to an Independent State* (1785) は、Ramsay, *Histoire de la révolution d'Amérique, par rapport a la Caroline Méridionale* として、フランス語版が1787年に出版された。他方、Gordon, *The History of the Rise, Progress, and establishment of the Independence of the United States of America* は1788年に出版されたが、ラムゼイの作品がフランスでほとんど売れなかつたため、ゴードンの作品のフランス語版は実現しなかつた。

は、しょっちゅう、何かのたびごとに、ポケットから紙切れを取り出して備忘録として書き付けた。そして、暇になると、それらを綺麗に写し取った。けれども、そうできる機会は減多になかった。そのため、こうしたスクラップはぼろぼろですり切れていて殴り書きされたものだった。私はそれらを他のものと一緒に製本屋に綴じさせた。製本屋は私の部屋に入ってきて私の目の前で綴じていった。彼にはその紙の一枚たりとも読む機会はなかった。今日になって、25年もあるいはもっと経過してしまい、私は全体を見直すことにした。時と共に感情も過ぎ去って、ことを行った理由だけが判断の基準となった。そこに私が記録した情報のいくつかは、今では省かれている。なぜなら、私の判断では、省いてしまった情報は、不正確なものあるいは疑わしいもの、また、私たちに関係しない単なる個人的なあるいは私的⁽⁷⁵⁾なものだからである。」

ジェファソンは事実を記録しようとしていくつかの試みをした。そうした試みは時系列的には3つの段階に分けられる。最初、その試みは、少なくとも國務長官職に就任した直後まで、事実を自身で記憶するか、他者に記録させるか、いずれかだった。つまり、ジェファソンは自身でメモを取ることをしなかった。けれども、第二の段階では、事実⁽⁷⁵⁾に立ち会うたびごとに、自身ですべてメモを取った。最後の段階つまりこの文章を記したときには、これまで取ってきたメモの取捨選択を自分の判断で行った。

注目すべきは第二の段階である。ジェファソンは自らが立ち会った事実をメモという形で記録した。「何かのたびごとに、ポケットから紙切れを取り出して……書き付けた。」メモは「殴り書きされたものだった」。そうしたスクラップに彼自身は手を加えることなく「製本屋に綴じさせた」。このジェファソンの歴史にたいする態度はかつてとは大きく異なるものである。かつて歴史とは普通の事象を通じて道徳感情を鼓舞するものだった。重要なのは普通の事象を効果的に伝える叙述だった。今や、叙述の効

(75) Jefferson, The Anas, 1791-1806. selections: Explanations of the 3. volumes bound in marbled paper, Feb. 4, 1818, in *Jefferson Writings*, 661参照。

果はまったく顧みられていない。反古紙のような紙切れに事実を記すだけである。ジェファソンにとって、歴史とは、事実を効果的に叙述することではなく、事実そのものとなったのである。

こうした認識をジェファソンは少なくとも1815年までは持っていたようである。ジョン・アダムズ宛書簡で次のように述べている。「アメリカ革命の歴史を主題に誰がそれを書くのかをあなたは問題にされています。誰がそれを書くのか、将来、誰がそれを書くことができるのか、と。誰もおりません。表面上の事実を除けば。すべての会議も、計画も、議論も、扉を閉ざした大陸会議の中で行われたのでした。私の知る限り、メンバーの誰も、そうした事柄についてノートを残してはいません。そうした事柄こそが、歴史の命であり、魂であり、永遠に知られねばならないものなの⁽⁷⁶⁾に。」

歴史とは扉の閉ざされた密室の中で生じる事象なのである。その事象を理解できるのは、その密室の中にいてその事象に立ち会うことのできた者たちだけである。あるいは、立ち会った者たちが残した信頼できる史料を参照できる場合しかない。歴史は、それを叙述する仕方ではなく、極めて個人的な一回限りの事実として、ジェファソンに理解されるに至ったので⁽⁷⁷⁾ある。

(76) Jefferson to John Adams, Aug. 10-11, 1815, in Lester J. Cappon, ed., *The Adams-Jefferson Letters: The Complete Correspondence between Thomas Jefferson and Abigail and John Adams* (1959, rep. 1987), 452参照。

(77) ジョン・アダムズは1787年に次のように述べている。ギリシア史は「八角形の部屋で、その壁にも、天上にも、一面に鏡が張られている。それが役に立つのは、乙女が、あるいは、あなたが望むなら青年紳士が、ユーモアをなくしたときだ。そうしたときにその部屋に入ると、どの側に目をやっても自分の顔と姿が際限なく見られるだろう。自分が怒って崩れた様子が顔に表れているのを見れば、人格を取り戻し、気分を直して、素晴らしい姿になるだろう。」Adams, *Defence of the Constitutions of the United States of America*, in Charles Francis Adams, ed., *The Works of John Adams*, IV (1851, rep. 1971), 469参照。誰でも出入りできる部屋というアナロジーではるか2000年も昔の古代ギリシアが語られている。1815年のジェファソンにはわずか40年前でさえ限られた人しか出入りできない密室なのである。1815年にはアダムズもジェファソンと同様の認識に至っている。

Ⅲ ただ一つの出来事

1 ジェファソンは、アメリカ独立革命の当事者として、その事象が大きな歴史的意義を持つものであったとしても、その事象はそれに実際に立ち会った個人にしか認識できない一回限りの事実であり、叙述の効果よりも事実そのものを伝えることこそ重要である、と認識した。こうした認識をもたらしたのは彼の極めて個人的な経験だったと筆者は考える。

1782年11月26日付フランソワ・ジャン・ド・シャトリユ宛書簡で、ジェファソンはこう記した。「その出来事が起こる前には私の人生設計は定められたものでした。私は自分が引退という腕に抱かれていることを喜んでおりました。そして、家内の事柄や学問に関する事柄に、将来のすべての幸せがあると考えておりました。あるただ一つの出来事が私の計画のすべてを消し去ってしまいました。そして、私の心に埋めることのできない空白を残して去っていきました。⁽⁷⁸⁾」

1782年9月6日、ジェファソンの妻、マーサ・ウェイルズ・ジェファソンは逝去した。その「あるただ一つの出来事 (a single event)」がジェファソンの定まっていると考えられていた人生を変えた。ジェファソンの人生は、普遍的な価値を持つ道徳感情によって律される、あらかじめ定められたものはずだった。将来も普遍的な価値に律せられているはずだった。だから、「将来のすべての幸せ」もジェファソンは予想できるはずだった。けれども、「ただ一つの出来事」があらかじめ定められていると考えられてきた事柄すべてを消し去ってしまった。「ただ一つの出来事」は予想できるものではなかった。ジェファソンの世界は予想できるものではないことが明らかになった。「ただ一つの出来事」は事実そのものとして重要だった。それをどう叙述するかなど、問題ではなかった。「ただ一つ

(78) Jefferson to Chastellux, Nov. 26, 1782, in *Jefferson Writings*, 780参照。当該箇所
の翻訳は西川秀和『ジェファソン伝記事典』、131頁にもある。

の出来事」と記せば十分だった。ジェファソンの世界はただ一つの事実そのものによって覆ってしまうことが、認識されたのである。

2 ジェファソンはマーサと1772年1月1日に結婚式を挙げ、ジェファソンの『自伝』によれば、その後の10年間は「何ものにも妨げられない幸福のうちにあつた」⁽⁷⁹⁾。けれども、1782年、6人目の子供の出産後にマーサは合併症のため体調を崩し死の床についた。このとき、マーサはローレンス・スターンの小説『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』第9巻第8章の文章を引き写した。ジェファソンはおそらく1770年代の初め頃からスターンの作品に親しみ、マーサもそれに感化されていたのだろう⁽⁸⁰⁾。それは次のものである。

「何しろ時は容赦なく空費されて行きます。私がつどる一字一句が、いかに急速に私の生命も私のペンの後を追っているかを告げてくれるのです。私に残されたそこばくの日数、そこばくの時間数は、いとしいジェニーよ！そなたの首にかかったルビーの珠よりもなお貴重なものなので、しかもそれが風の日の軽い雲のように、われわれの頭の上をどンドン飛んで行って二度とかえって来ないのです——すべてがたいへんな勢いでどンドンすぎて行く——そうやってそなたが捲き毛をひねったりしている間にも。ほれ御覧！そなたの髪にも白いものがまじっているではないか。」⁽⁸¹⁾

差し迫った死に直面して、残された日々は貴重なものであるにもかかわらず、どンドン過ぎ去ってしまう。その流れの速さはい先ほどまで黒かった髪の毛を白髪にしてしまうほどのものなのだ。このように急速に流れ去る時間は客観的なものではあり得ない。マーサが感じ取った時間の早さは人生の儚さを脆さを象徴するものだった。

(79) *Jefferson Writings*, 46参照。

(80) ジェファソンとスターンについては、Burstein, Andrew, and Mowbray, Catherine, *Jefferson and Sterne [=Jefferson and Sterne]*, in *Early American Literature* 29 (1994), 19-34参照。

(81) スターン『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見 下』（朱牟田夏雄訳 1969）、230頁参照。

『トリストラム・シャンディ』の当該箇所はこれで終わりではない。ジェファソンがそれに続く箇所を記した。次のものである。

「私がそなたの手に与える別れのキスの一回ごとが、それからその後につづく不在期間の一回ごとが、いずれは近々われわれの上に訪れるはずの永遠の別離の序曲なのだ。——

——ああ、天よ、われわれ二人に慈悲をたれたまえ！⁽⁸²⁾

ジェファソンもマーサも同じ時間の中にいる。ジェファソンとマーサの感性が共に捉えた、あまりにも早く過ぎ去ってしまう時間の中にいる。彼も、マーサも、引き写されるスターンの文章ではおなじ主体なのだから。二人の過ごした時間は、客観的な時間ではなく、1782年に人々が過ごした時間とはまったく流れの速さが異なる時間なのだった。それまでの幸せだった二人には感じるこのできない、今の二人にしか感じ取れない、一方が欠けたら感じ取るこのできない、そのような一回限りの二人だけの個人的な時間なのだった。

ジェファソンは、二人が写したスターンの文章を、マーサの死後に、マーサの一房の髪の毛と共に、彼のデスクの秘密の仕切の中に隠した。この文章が発見されたのは、ジェファソン自身の逝去からほぼ半世紀後のことだった。ジェファソンは、マーサと自分の二人だけの事実を、デスクの秘密の仕切の中という密室に閉じこめたのである。⁽⁸⁴⁾

ジェファソンは、少なくとも1770年代には、歴史において人間にも自然にも普遍的な事象が繰り返されると認識していただろう。歴史叙述はそのような普遍的な事象を伝えることで道徳感情の鼓舞を目的とするものだった。

(82) スターン『トリストラム・シャンディ 下』、230-231頁参照。

(83) Burstein and Mowbray, *Jefferson and Stern*, 20参照。

(84) ジェファソンとマーサのこのエピソードは、西川秀和『ジェファソン伝記事典』、131-132頁にも紹介されている。さらに、このエピソードについては、Spahn, *Time and History*, 80-82も参照。Spahn, *Time and History*, 81には、Fig. 3として、二人が引き写した文章の写真が掲載されている。

た。そして、普遍的な事象の本質に変化はないから、事象そのものではなくそれを効果的に伝えることが歴史叙述の課題だった。『アメリカ独立宣言』起草に見て取れるジェファソンの姿勢は、このような彼の歴史認識を示すものだろう。「日の下に新しきことあらざるなり」という箴言こそ、この時期のジェファソンの歴史認識を示すものだった。

けれども、ジェファソンは、人生にはまったく個人的な一回限りの事象があることを、1780年代半ばまでには、認識するようになっただろう。それに伴い、個人の人生が予想できないものであることも理解するようになった。そのような個人の人生が関わる歴史も普遍的な価値を必ずしも伝えるものではない、と捉えられるようになっていっただろう。とりわけ、1780年代後半にアメリカ独立革命という自らが主体的に関わった事象が歴史として語られるようになったとき、その叙述には信頼のおけるものとそうでないものがあることが認識された。その違いを生じさせたのは、叙述の効果ではなく、叙述されている内容、つまり、叙述されている事実それ自体の信憑性だった。ジェファソンが大陸会議の密室の中で経験した歴史的事実は、それが一回限りの個人的経験という限りで、愛妻マーサの死と同じレベルのものだった。ジェファソンは、歴史とは一回限りの個人的経験である、という認識に1780年代末には至っていたであろう。そのため、国務長官として経験した事実を文字として自ら記録するようになったのである。

ジェファソンには以上のような歴史認識の変遷を見て取ることができる。循環史観から個人的経験としての歴史という歴史認識に変わること、ジェファソンは、「日の下に新しきことあらざるなり」という歴史認識を棄てたのである。彼にそれを確信させたのは、彼自身がアメリカ合衆国第三代大統領職に選出されるという、彼自身の個人的経験だったのである。

すでに述べたように、本稿はジェファソンの個人研究を目指すものではない。アメリカ革命期にはさまざまな歴史認識が存在したことを、一人の個人が時期によって異なる歴史認識を持ちえたという観点から、ジェファ

ソンを素材として、検討したにすぎない。そのため、例えば『アメリカ独立宣言』という文書にたいするジェファソンの態度がその歴史認識の変化に応じて変遷する、といった主題を本稿で扱うことはできなかつた。⁽⁸⁵⁾けれども、先に紹介したように、晩年、ジェファソンは、自身が『アメリカ独立宣言』の「著者 (Author)」であると、墓碑銘で宣言した。⁽⁸⁶⁾これは、その歴史認識の変化に基づいて、その文書の内容についても、叙述についても、自らが「著者であること」の重要性を認識した結果なのではないだろうか。

何らかの文書の「著者であること」が重要であると、このように宣言されたにもかかわらず、ジェファソン存命中の最後に公になった文書には内容そして表現の「盗用」があった。ジェファソンは1826年7月4日ワシントンで開催される独立宣言50周年記念の祝賀式典に招待された。体調不良のため出席は辞退したが、次の文言を含む文書を開催委員会に送付した。「すべての目が人間の権利に開かれているか、開かれつつあります。科学の光が遍く広がり、次の明白な真実が万人の目に曝されたのでした。大多数の人間は背中に鞍を背負って生まれるのではないこと、そして、わずかな恵まれた者たちが長靴を履いて拍車を付けて、神の思し召しで法に適って⁽⁸⁷⁾大多数の人々の背中に乗れるわけではない、ということです。」けれど

(85) 例えば、『アメリカ独立宣言』を起草した段階とその成立過程を詳細に記した『自伝』の段階とでは、ジェファソンのこの文書にたいする態様は異なっていると筆者は想定する。けれども、この問題に立ち入ることはできず、さしあたり、Detweiler, *Changing Reputation*, 565-574; Maier, *American Scripture*, 170-189; McDonald, *Changing Reputation*, 180-195参照。なお、『自伝』を書き残すという行為がジェファソンにとってどのような意義を持ったかについては、Sloan, Herbert, *Presidents as Historians*, in Richard Alan Ryerson, ed., *John Adams and the Founding of the Republic* (2001), 266-283; とりわけ267; 268-270; 274-275; 277参照。もっとも、Sloan 論文ではジョン・アダムズに関する議論の傍証としてジェファソンによる『自伝』執筆が考察されている。

(86) *Jefferson Writings*, 706参照。

(87) Jefferson to Roger C. Weightman, June 24, 1826, in *Jefferson Writings*, 1517参照。なお、西川秀和『トマス・ジェファソン伝記事典』121頁にも当該書簡の翻訳

も、この「明白な真実」は1683年にライハウス陰謀事件の発覚で処刑されたりチャード・ランボルトの辞世の演説に述べられている。自分は「騙された世代、無知を押しつけられた世代」からは解放された。「そのような世代には貧困と隷属がのし掛かっているが、自分がそれを受け入れることはなかった。」自分の信じるころはこうである。「神は、大多数の人間には鞍を背負わせ口枷を嵌めさせ、残りのごくわずかの人間には拍車付きの靴を履かせている」わけではない、と。⁽⁸⁸⁾

これも「ジェファソンのアンビヴァレンスとアンビギュアティ」の一例だろうか。それとも、最晩年に至ってまたもやジェファソンに認識の変化が生じたのだろうか。本稿の枠組を超えた個人研究がなお必要であることを認識せざるをえない。⁽⁸⁹⁾

けれども、少なくともアメリカ革命期にさまざまな歴史認識が存在したことは、本稿の検討によっても明らかになったであろう。そして、アメリカ独立革命を歴史として叙述することで、アメリカ独立革命は歴史認識の変更をもたらすものでもあったのである。

がある。

(88) ランボルトの辞世の演説の引用は Colbourn, *Lamp of Experience*, 223-224による。ジェファソンの当該書簡とランボルトの演説については、Adair, Douglas, Rumbold's Dying Speech, 1685, and Jefferson's Last Words on Democracy, 1826, in *William and Mary Quarterly* 9 (1952), 521-31参照。

(89) ジェファソンに見出される矛盾を説明するために用いられる常套句である。とりわけ、自然権による「万人の平等」の主張者と黒人奴隷制による大農園主という矛盾の説明に用いられる場合が多い。Huddleston, Eugene L., *Thomas Jefferson: a reference guide* (1982), xv 参照。